法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-30

<紹介>木曽 ： 木曽綜合農村調査報告書

青木，千枝子

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
4
(開始ページ / Start Page)
75
(終了ページ / End Page)
76
(発行年 / Year)
1956-05-01

いはじめて本来の自然的な村が村としての機能を発揮できるようになりこれが「郷村制」としてとらえられるというふうに理解されていた。しかしこの様な問題よりも更に重要なことは複雑な半奴隷制的諸身分層をもつて構成されている中世の農民の生活の場としての村落は村落社会の構造、諸機能にこのような関係をいかなる形で投影し、その村落社会は如何なる性格をもつているかといつた問題であろう。」と社会経済史家の「村落」に対する観察態度がよく現われている。しかし我々に大事なことは中村氏も指摘されたように中世村落の実態すなわち古代村落とは内容的に類似のものか異質のものか、もし異質のものであればどのように内容的に異質のものであるか。なぜ異質のものでなければいけないのか。「中世村落」という言葉にとらわれずその実態について把握する事であろう。地理学者の労作としては米倉二郎氏「中世村落の様相—附円覚寺領尾張国富田庄高野山領紀伊国官省符庄—」（地理論叢第8巻昭11）の他、極めて少なく、実態はほとんど明かにされていない現状である。

最後に今一つ興味をそそるものとして鈴木栄太郎氏の「北海道だより」をあげておきたい。長い間鈴木教授の持論として胸裏にあつた課題は日本の農村は結局において米国のテーバンコミュニテイの方向に変容し、農村の田舎町えの依存度が更に大きくなるという事で北海道の農村の社会構造がアメリカのそれに最もよく似ているとの考えからこの事を追求することが渡道の一因ともなつたほどで、氏の「だより」は北海道内陸の農村地域には農民と農家はあるが内地でいう自然村（密居的村落をなす）はない。そして密居集落は非農業人口からなる田舎町で市街地と呼ばれているものだけである。」と北海道と内地の質の差を非常に大きく考えて居られる。はたして両者は教授の考えられるように本質的差異があるのであろうか。村落の成立年代の新旧という「時」を考慮に入れ更に深く村落の実態を検討する必要のある事を北大教授井上修次氏はかつて指摘して居られた事を思い出す。（1956.4.12）

木曽一木曽綜合農村調査報告書

青木　千枝子

本書は昨夏に行われた綜合調査のまとめとして発行されたものである。私自身調査の一員として参加しているので、紹介を書くにあたつて、いさゝか手前みそになるおそれがあつてはと、公平な立場からと思いつゝ筆をとる

事にする。

まず第一に、この本は多くの調査員の提出した記録をもとに編集されたものであり、編集にあたつては、4つの班毎にまとめたものを集録した点に、各項に個性がある事をみとめたい。と共に同じような性質の項が重複したり、比較が細い点では突込みの出来ないものがあるという弱点も生れて来る。このような問題をも含むとはいえ、ともかく学生の自治的な農村調査の発表としてまとめ上げられた事は、何といつても大きな業績であり、数多の大学、各個の専攻別という異つたグループが結集して一つの調査をなしえたという事は、今後の調査活動に対して、新しい在り方、また将来への方向をしめしたものといえよう。

次に本書の内容について書いてみると、南田村、王滝村、上村町、田立村の4項に分れ各項毎に、村の概況および「史、経済生活（農業、工業、賃労働を含む）、衣食住、政治等の章に分れて書かれている。同じ木曽谷に位置をしめながら、これからの4つの地域は、それぞれ共通点をもちながら、また異つた生活をしている。各村における特異性を強調する為め、村の問題という項目をつけて、〝南田村〟では記名共有地係争、馬小作、〝滝王村〟では慣知用水二子持ダム、〝上松町〟の木工製材、〝田立村〟の生活改善運動、をあげている。しかしこのような特異性を持ちながら、木曽といえば桧、すなわち国有林という問題が出て来るのであるが、各村の項には勿論の事、何らかの形でふれてはいるが、〝上松町〟の第Ⅱ部第章国有林についての項が、国有林の歴史から始まり、営林署の性格、経営の合理化と、一応まとめてあるのでわかりやすい。前にもいつたように重複する点でありながら、他の項ではふれていない点まで突込んであるところに、〝上松町〟すぐれた点を認める事が出来る。

しかし、この報告書の持つ特色は、このような調査を単なる調査だけに終らせずに、参加者一同の勉学場としている点である。活動の反省という章がおのおのにあり、その中で、共同の調査の進め方、チームワークの取り方を論じている。綜合調査の将来の在り方として、多くの人々が手をたずさえる機会が増して行くに従い、この反省の項は幾多の問題を提出してくれている。学生のなしえた一つの仕事という事と共に明日の為の学問をなして行く人々に共感をもたらすものとして、一読されて欲しいと思うものである。

（1956、4、2）